

Continuation and Development of Casa, a Student Commons in the Faculties of the Humanities and International Cultural Studies: Developing Interactions among Students across Departments and Grades

HORII Kayoko, ESAKA Yukiko, TAMURA Yuka, NAKAOKA Juri

“The Faculty of Humanities and the Faculty of International Cultural Studies Student Commons Casa” (hereafter, Casa) was established in 2018. It aims to stimulate the faculties and encourage interactions among students and between students and teachers.

In 2022, Casa conducted the following major activities: continuation of the events called “Gathering with Teachers,” publication of the information magazine *Eiden E-Den* as a new project, and a goods project to stimulate and raise awareness of Casa among the students. First, approximately one to three events were held each month in which teachers discussed topics related to their fields and interacted with students. The students also participated in organizing the “Gathering with Senior Students” events. For the magazine, students covered recommended spots along the Eizan Railway to publish an information magazine. In relation to the third activity, we created original items (e.g., plastic document folders and calendars) to increase awareness of Casa among students. These activities increased interactions between faculty members, mutual support among students, places in which students can stay and belong to, and interaction and cooperation with local communities. Our future goals are to continue and increase the variety of activities and increase the number of students involved in Casa activities.

One of the functions of Casa is providing students with a place to stay. It is defined by the concept of an active learning space. Thus, in the future, it should be also examined how the spaces of Casa are used within this concept and verify its effects on students’ life in the university. Furthermore, we must be proactive in providing and disseminating information on Casa’s activities inside and outside the university.

人文学部・国際文化学部スチューデント・コモンズ Casaの継続と発展

—学科・学年を越えた学生交流の育成—

堀井佳代子 HORII Kayoko
田村有香 TAMURA Yuka

恵阪友紀子 ESAKA Yukiko
中岡樹里 NAKAOKA Juri

はじめに

人文学部・国際文化学部スチューデント・コモンズ Casa (以下、Casa) は、2018年度に「人文学部スチューデント・コモンズCASA¹」として出発した。当初は、清風館地下のスペースを活用し、学部の活性化、学生間の交流、学生と教員の交流を目的として活動を開始した。2019年度より、流溪館R-101 (スチューデント・コモンズ)、R-119 (人文ライブラリー、現人文学部・国際文化学部ライブラリー) に活動場所を移し、月例のイベント (先生を囲む会) や半期ごとの大規模イベント (新入生歓迎会や留学生交流会) などを企画実施し、学生間の交流、学生と教員の交流、学部活性化に取り組んできた。また、Casa の Twitter (現 X) や Facebook、ポスターなどを活用した活動の周知なども、学生主体で行ってきた。

2020年度以降は、新型コロナウイルス感染症の影響により活動を制限されながらも、教員のインタビューを Twitter で公開したり、学生と教員をつなぐ情報交換・悩み相談の場として LINE オープンチャットを開設したりと、学生とのつながりを維持することに尽力した。また「囲む会」についても Zoom を利用してオンラインで開催し、大学に来ることさえできなくなった学生たちに、学びや交流の場を提供した。

2021年度は、これまでの活動に加え、「Udemy Business² を活用した大学教育プログラムの実践および検証に関する教育支援制度」に採択され、これを活用し、Casa 学生スタッフのスキルアップ、スキルアップした学生が下級生の手助けをするというピアサポートの取り組みも行った。

これまでの活動については、『京都精華大学紀要』

52号～56号で報告している。

Casa の活動について、学生に向けては前述の SNS のほか、学内看板でのイベント告知、ポータルサイトからの情報発信、ポスターの張り出しなどで周知を図った結果、他学部の学生にもその活動内容が認知されつつあり、イベント参加者も増加している。また、毎月の学部教員会議でも活動報告を行うことで、学部教員には Casa の活動が理解され、「囲む会」などに協力してくれる教員も増えてきた。Casa の活動については、浸透してきたと考えられる。

しかし、認知度向上やイベント参加者の増加傾向は見られるものの、参加者が固定されているなど、まだまだ問題点は多い。そこで、2022年度は、(1) 学部内交流の促進、(2) 学生同士の相互扶助、(3) 居場所の確保、(4) 地域との交流・連携、の四つの課題を掲げ、活動をする事とした。

具体的には、学部内交流の促進、居場所確保としては「囲む会」の継続、地域との交流・連携として叡山電鉄沿いのおすすめスポットを紹介する「電え〜でん」の発行、学部活性化・認知度を上げるためのグッズプロジェクトを企画実行した。

本稿はこれらの活動事例の紹介と今後の展開を述べるものである。

1, 2022年度の活動

1-1, ミーティング

授業期間中の毎週水曜日、昼休み (12:15～12:50) にスタッフミーティングを行った。イベント企画や、Casa の各種活動について話し合いや進捗状況の共有を行った。ミーティングの司会、および記録

は学生スタッフを中心に担当した。議案と議事録はGoogle ドライブ上で共有し、ミーティングに参加できなかったスタッフも閲覧できるようにした。

1-2, SNSでの情報発信

Casa のTwitter (現X, @JinbunC) は、学生スタッフが主担当となって、主にイベントの開催情報について投稿を行ってきた。しかし、Casa の活動とは無関係の内容を記した投稿が目立つようになり、運用方針を話し合うこととなった。その後、なりすましアカウントの発覚等を受け、教員スタッフで話し合い、上記ミーティングで学生スタッフとも協議の上、2023年度現在は以下の方法で運用を行っている。なお、投稿内容はCasa のイベント・活動の告知、学部の教員紹介に限ることとした。

Casa Twitter 投稿手順

- (1) 投稿したい内容がある場合、まずスタッフミーティングで申し出る
- (2) Twitter 担当の教員スタッフに、投稿内容をメールで送信する
- (3) 担当教員は、内容を確認の上、投稿する

1-3, イベント活動

以下では、2022年度のCasa のイベント活動について報告する。

(1) オリエンテーションでのCasa 紹介

3~4月、9月のオリエンテーションで、学生スタッフがCasa の紹介を行った。紹介内容としては、スチューデント・コモンズおよびライブラリーの紹介、Casa の活動紹介、スタッフ募集である。

(2) 先生を囲む会

学生・教員の交流の場として継続している「囲む会」は毎月1回程度を見込んでいたが、学生からの企画が多くあり、次項の「3年生を囲む会」と合わせて月1~3回ほど開催した。参加者が徐々に増えてきたことから、企画した学生にとってもやりがいを感じられるものとなったと思われる。また、以下に述べる立て看板の設置効果もあってか、他学部の学生の参加も増えてきている。2021年度までは、教員の呼びかけで開催されることが多かったが、2022年度は学生からの発案が多かったこと、企画の数が増えたことも成果と言える。実施した企画は以下の通りである。

開催日	企画名	参加者 (スタッフを除く)
5/23	「げてもものから美術品へー京都を舞台にー」 山名さん・吉元さんを囲む会	10名
6/8	「世界の恋愛事情」 カインさん・恵阪さん・ソーンさんを囲む会	14名
6/16	「三国志「食」義」 是澤さん・清水さん・稲賀さんの対談	5名
7/12	「闘牛-徳之島(鹿児島県)とスペインの比較-」 ラリさん・田村さんを囲む会	9名
7/28	「怪談会談」末次さん・久留島さん・堤さんを囲む会	27名
9/9	「お月見の会」恵阪さん・堀井さんを囲む会	7名
12/16	「小椋先生と歩くセイカ樹木観察ツアー」	14名



図1 先生を囲む会ポスター
「お月見の会」「セイカ樹木観察ツアー」(学生制作)

(3) 3年生を囲む会

学生が主体となって「3年生を囲む会」も企画された。以下に示すように、フィールド・スタディーズの成果や教育実習の経験など、先輩から直接話を聞くことのできる企画となった。今後、事前の周知を早い段階で行うことで、参加者数も増えるものと思われる。

開催日	企画名	参加者 (スタッフを除く)
7/29	「開茶の会」(フィールド・スタディーズ報告会)	13名
11/9	「フィールド・スタディーズの成果からー朱雀大路・遊女・日本茶ー」	3名
11/16	「御朱印を語りあう会」	3名
12/16	「教育実習の体験を語る会」	5名



図2 「聞茶の会」の様子

(4) 学部の交流を深めるイベント

学部の交流を深めるイベントとして、以下の企画を行った。4月に行った「芋を焼く会」は、学生広場でじゃがいも・さつまいもを焼き、焼き上がるのを待つ時間で交流を深めるという企画であったが、大変好評を博し、11月に第2弾を行うことになった。人文学部・国際文化学部に限らず、他学部からの参加者も多く、学部を超えた交流の場となっている。

6月の「1回生上回生交流会」は学生スタッフが中心となって企画・運営を行った。交流会では、各専攻から出題されたクイズ大会、サークル紹介、質問コーナーなどが実施され、学年を超えた交流の場となった。1月の「のど自慢」は、新型コロナウイルスの感染対策が必要な時期ではあったが、十分な対策を行った上で実施した。

開催日	企画名	参加者
4/27	「芋を焼く会」	50名程度
6/20	「1回生上回生交流会」	30名程度
11/17	「芋を焼く会 第2弾」	50名程度
1/30	「新春！人文学部・国際文化学部 のど自慢」	14名



図3 「芋を焼く会」ポスター（学生制作）と実施の様子

(5) 立て看板作成

学生スタッフによる発案で、Casaの立て看板を作成した。単なる宣伝のための看板ではなく、イベントのポスター等の掲示スペースとして使用できるものとして作成した。立て看板設置以降、他学部の学生のイベント参加者も増えている。



図4 立て看板作成の様子と完成した立て看板

(6) 学生主催のイベント企画

1企画5～10万円程度の予算で、学生主催のイベント企画を募集し、コンペで採用することを計画した。学部の学びにつながるような内容の企画であること、飲食を伴わないこと（新型コロナウイルス対策のため）を条件として学生スタッフを対象に募集した。その結果、応募が2件あり、そのうちの1件「堤さんを送り出す会」が2023年1月18日に実施された。怪談師の方をゲストとして迎え、参加者は22名であった。



図5 「堤さんを送り出す会」ポスター（学生制作）と当日の様子

2. 叡山電車沿線に関する活動

2-1. 情報誌「叡電え〜でん」の発行

新入生に情報発信をする目的で、「駅から15分で行ける叡電沿いおすすめスポット」をコンセプトとし、学生が実際にお店・寺社などに行って取材を行い、紹介の文章・写真を冊子にまとめることを企画した。この企画が開始したのは2021年度中であり、まだ新型コロナウイルスの感染状況が改善していなかった。そのため、2～4人ほどのグループに分かれて、

取材を行うこととした。取材先に渡すための名刺(図6)、取材するときに聞くべき情報をまとめた取材用メモな



図6 作成した名刺

どを事前に作成した。取材担当者は、チームで取材先の選定・取材の許可取り・取材(インタビュー・撮影)・記事の作成・掲載の許可取りを行った。取材担当者とは別に編集担当者を決め、取材担当者の作成した文章・撮影した写真を集約して、編集作業を行った。当初の予定とは異なり、冊子ではなく、継続して出すことを想定した情報誌の形式をとることとなり、2022年4月にA4・4ページの「叡電え〜でんVol.1」を発行した(図7)。ここには、元田中駅の八百屋、木野駅のパン屋と喫茶店、八幡前駅のパン屋の情報を掲載した。学生の目線から見たお店のおすすめ情報や、お店の方の声を載せるもので、学生の取材の成果がよく表れた内容であった。

またvol.1の作成を進める中で、叡山電車(以下では叡電と略する)に企画を相談した結果、発行への協力を得られ、出町柳駅に本誌を置いて配布してもらえらることとなった。駅に設置された「叡電え〜でん」は好評で、すぐになくなることとなった。発行後の2022年5月19日にはvol.1発行の報告、次号作成の進捗の報告のため、叡電本社に学生・教員で訪問した。訪問した学生は次号発行に向けての意欲を強めた。また叡電の職員の方々から本誌編集について助言を受けることもできた。

引き続き次号の発行に向けて学生が分担して取材・編集を行い、2022年8月にvol.2を発行した。ここには茶山駅・一乗寺駅の飲食店、岩倉駅の飲食店の情報を掲載した。叡電から路線図の提供をうけ、より華やかな誌面となった。叡電の職員の方からの助言により、新たに編集後記を付けた。またお店の位置を示す地図を自作するなど見やすさが心がけられている。続くvol.3も取材担当と編集担当に分かれて作業が行われ、八幡前駅の三宅八幡宮、出町柳駅の京都大学総合博物館の情報を掲載したものを、2023年3月に発行することができた(図8)。

学生は一連の取材作業を通して、学外の人々と関わる経

験を持つことができた。取材先に温かく親切に対応していただいたこともあり、取材を終えた学生は具体的な「おすすめ情報」を多く挙げる事ができ、その熱量が記事にも反映されている。また編集担当者は、取材担当者に随時、確認をとりながら作業を行うとともに、デザインにも気を配っている。デザイン面で各号間の統一性を保ちつつも、表紙部分は毎号大きく変化させるなど、各担当者の工夫が見られる。また一旦、版面が完成した後も学生間での相互の記事の確認・改善点の指摘・それを受けた修正作業が行われ、発行に至ることができた。取材先から発行前に記事の修正を求められた際にも、教員と情報を共有しつつも、学生が窓口となって適切に対応した。

新入生のための沿線案内という当初の目的はある程度達成することができた。また学生の目線で、近くにあるけれども知らなかった地域の新たな魅力を発見することができた。学生は責任感を持って一連の取材・編集作業を行い、授業とは別の形で学外の方々との交渉を通して学びを得ることができた。

2-2. 光福寺資料の翻刻

「叡電え〜でん」の発行に向けた取り組みの一環として、叡電沿いの取材場所の調査を行った。そのなかで出町柳駅にある光福寺を訪れたところ、光福寺の所蔵する資料類の閲覧を許可された。歴史専攻の教員吉永隆記が中心となり、それらの資料の調査を行い、有志の学生とともに「出町柳光福寺の資料を読む会」を持ち、翻刻・講読を行っている。Casaの学生スタッフだけではなく、資料に興味のある学生が集まって行っている。学生が互いに協力しながら、地域に眠っていた未刊行の資料を読解し、学問的成果を挙げる事ができた。これらの成果は「光福寺所蔵卷子本の紹介 一」(『京都精華大学紀要』56号、2022年)として発表した。



図7 叡電え〜でんvol.1 木野駅より



図8 叡電え〜でんvol.3 表紙

3. 学部活性化・認知度向上のための グッズプロジェクト

Casa の活動をより広く知ってもらい、活動する学生を増やすためには何かできることはないかと考え、Casa を宣伝するオリジナルグッズを作成するグッズプロジェクトを立ち上げた。4名の学生が中心となり、2022年11月から活動を始めた。Casa オリジナルキャラクターを作成し、このキャラクターを使ったクリアファイルとカレンダーを作成し、2023年3月に学生・教員に配布した。クリアファイルにはキャンパスマップも併せて載せ、カレンダーは大学の学年暦を載せると

ともに、クォーター制とセメスター制のスケジュールを色分けして見やすくした実用的なものにした。親しみやすいオリジナルキャラクターのかわいらしさもあり(図9)、作成したグッズは広く用いられている。

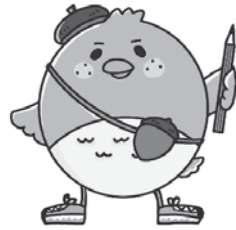


図9 Casaオリジナルキャラクター

どのようなグッズを、どのような形で作るのかを明確にせずにプロジェクトは始まった。そのことにより、学生から自由な発想で多くのアイデアが出された。そのなかから時間的・費用的な面を考え、現実的にできるものを選択していき、結果的にメンバー全員が納得できるものを作成することができた。内容の固まらないところから自由にアイデアを出し合い、話し合いを重ねて全員で取り組んだ結果と考えられる。

またオリジナルキャラクター作成は、京都精華大学内に多く落ちている「どんぐり」をモチーフとすることや、どんぐりを食べる鹿とは対立する存在である等の設定を学生が考えて丁寧に文章化してプレゼンテーションし、別の学生がそれを踏まえてイラスト化するという形で進められた。その結果、「どんぐり」の帽子やカバンを身につけるといった特徴的な見た目を持ち、一見するとふわふわしてかわいいに表情はえらそう、という不思議な魅力のあるキャラクターができあがった。これはミーティングを重ねながら、チームで取り組んだ協同の成果である。その後、配色や細部については、メンバー全員で意見を出し合い、完成した。このようなプロセスを経たことで、当事者意識が高まり、自分たちの作ったキャラクターのグッズを世に出す、という同じ目標に向かうことができた。また各学生が自発的

に役割を分担できたことも重要である。各人の得意な部分を生かしつつ、後半にはそれまで出来なかったことに挑戦する姿勢も見られた。また作業の最終段階では、自分ができない場合はフォローを求める、それに応じて代わりに作業を行うという、学生間の分担もうまく行われていた。

このプロジェクトのなかでは、グッズ作成のためのイラストレーターの講習会も開かれた。この講習会や、自力で動画などを視聴することで、それまで使ったことのなかったイラストレーターのスキルを身につけた学生もいる。このようなスキルは、今回のような完成させたいものが明確で、モチベーションも高い場合に、よりスムーズに習得できることを痛感させられた。

学生がアイデアを出し、協同作業を通してオリジナルグッズを形にすることができた。Casa の宣伝・周知という当初の目的を達成できた。またそれ以上に、学生・教員の役に立って、喜ばれるものは何かを学生が考え、チームの力を発揮して作成することができたのが、大きな成果である。

4. 活動の総括と今後の課題

4-1 2022年度の活動の総括と課題

2022年度の活動を開始するにあたり、(1) 学部内交流の促進、(2) 学生同士の相互扶助、(3) 居場所の確保、(4) 地域との交流・連携、の4つのポイントを確認している。以下、それぞれの活動とその評価について、改めてこの軸からの評価と課題の整理を行う。

(1) 学部内交流の促進

「先生を囲む会」「1年生上回生交流会」「3年生を囲む会」「芋を焼く会」「のど自慢」が該当事業であるが、ここでは授業だけでは生まれない学部内交流が得られた。芋を焼く会については学内の認知も上がり、他学部からの参加も多く見られた。

一方、本論文のサブタイトルでもある、学科を越えた学生交流に関しては課題が残る。まず、Casa のスタッフ学生およびイベント参加者の学生はそのほとんどが人文学科の学生であった。また、サポート教員も人文学科が約7割を占めている。学科の人数規模に相当しているともいえるが、より積極的な交流が望ましいことは議論を俟たない。

今回紹介した「グッズプロジェクト」に代表されるような多様な取り組みがあれば、より多様な関心

を持つ学生がCasaの活動にコミットできることとなる。オリエンテーションでのCasa紹介、SNSでの情報発信、イベント宣伝のポスターや看板の設置などは継続しつつ、教員・学生両者ともに、Casaがその交流のハブの役割を強めるための工夫が、引き続き必要である。

(2) 学生同士の相互扶助

「1回生上回生交流会」「3年生を囲む会」が該当事業であるが、ここで注目すべきなのは、いずれも学生からの発案ということである。自分が実際に困ったこと、困っていること、欲しかった情報などを学生目線で丁寧に拾い上げることによって、教員からでは発案できないような企画となった。また、参加者同士の熱心なやりとりの様子が見られた。

グローバルスタディーズ学科も2021年の設立から2年が経過し、上級生が育ちつつある。また、人文学部・国際文化学部の留学生比率は全学ほど高くないが、9%程度である。今後はより広い対象者を想定した相互扶助の在り方が課題となるだろう。

(3) 居場所の確保

コロナ禍の影響を高校時代・大学時代に大きく受けた現在在学中の学生たちは、課外活動の機会が大きく損なわれている。人との接触や活動場所、活動内容が大きく制限された中での物理的及び精神的な居場所の確保は困難を極めた。

Casaにおいては、前述のように「学部内交流」や「学生同士の相互扶助」の機会を設けることで、精神的な居場所の確保に貢献したといえる。

一方で、物理的な居場所の確保に関しては課題であろう。Casaはその活動拠点として流溪館R-101(スチューデント・コモنز)とR-119(ライブラリー)を利用しているが、そのスペースをいかに充実させ、また利用状況を向上させるか、学生の意見なども反映しながら取り組んでいく必要がある。この件に関連して、アクティブ・ラーニング・スペースとしての課題を4-2で後述する。

(4) 地域との交流・連携

「叡電え〜でん」が該当事業である。京都精華大学は叡電と包括連携協定を結んでいる。その縁を活用し、学生や教職員が多数通勤・通学に利用する叡電の沿線を紹介する企画が持ち上がった。ターゲットとしては主として大学周囲の情報を必要としている新入生を設定したが、その内容の充実度は学内の

他学年の学生のみならず、叡電利用客にも受け入れられるものとなった。また年間2〜3号発行するペースで取り組みは継続しており、交流や連携を長期間かけて育てていく土台が築けた。また、叡電沿線の光福寺資料の翻刻とその結果の社会への還元など、大学ならではの取り組みも進んでいる。

令和3年12月の中央教育審議会分科会の審議内容³によれば、地域社会の活力の低下などの現状を踏まえ、「地域の中核となる大学」の必要性が指摘された。「地域において大学が果たす重要な役割」については、以下のように整理されている⁴。

- ①人材育成機関としての役割(必要不可欠な分野の従事者、地域産業のDXやグローバル化を推進する人材、地域社会を活性化する人材)
- ②高度な研究能力を有する機関としての役割(産業界等との連携、地域の発展や課題解決に資する取組の実行)
- ③地域の文化・歴史を発展・継承する役割(地域の魅力の発信)
- ④知と人材のハブとしての役割(海外等の他地域との窓口)

このような大きな視点からの役割もにらみつつ、人文学部・国際文化学部、あるいは京都精華大学としてどのように地域と連携していくかは、大きな課題である。

4-2 アクティブ・ラーニング・スペースとしての課題

日本の大学において、ラーニング・コモنزとは図書館の共有スペース等の活用や設備の充実から導入事例が積み重ねられた。初期の研究論文としては、2008年のお茶の水大学図書館に関する論文⁵や、マサチューセッツ大学の取り組み紹介⁶などが挙げられる。

文部科学省の「大学における教育内容の改革状況」調査では、2011年度の調査結果⁷で「ラーニング・コモنزの整備・活用を実施している大学数」が初めて紹介され、257大学(国立、公立、私立、全ての対象大学を母数として34%)と報告されている。ちなみに文部科学省はラーニング・コモنزを「大学図書館等における、学生が学習のために集うことのできる共有スペース。グループ活動エリア、プレゼンテーションエリア、PC利用エリア等、個人の自習環境に加え、グループワークにも適した学

習環境をさす。』⁸と説明している。ラーニング・コモンズとしての調査結果は2015年度まで紹介されており、482大学(62.7%)⁹と導入大学が増えていることがわかる。

2016年度の調査¹⁰からは項目名が「アクティブ・ラーニング・スペースの整備・活用」と変更され、現在に至っている。アクティブ・ラーニング・スペースは、「学生が能動的学修のために集うことのできる共有スペースを指します。グループ活動エリア、プレゼンテーションエリア、PC利用エリア等、個人の自習環境に加え、グループワークにも適した学習環境を指しています。なお、大学図書館等におけるラーニング・コモンズを整備・活用している場合も該当します。』¹¹という説明の通り、ラーニング・コモンズを包含する概念となっている。

最新の2021年度の調査¹²によれば、導入されているのは652大学(84.1%)にのぼる。全学的な履修指導または学修支援制度の取り組みとして文部科学省が設定している15の調査項目の中では2番目に多くの大学に浸透している。第1位はオフィス・アワーの設定(724大学、93.4%)、第3位は学生の就職支援のためのセンター等の設置(642大学、82.8%)である。

このように、アクティブ・ラーニング・スペースの設置と利活用は、もはや大学にとって標準になりつつある。また、図書館に限定されない多様なスペースと多様な運用事例が増えてきている。

Casaは学部のスペースであり、空間的にも設備的にも決して恵まれてはいない。しかし、その取り組みについてはアクティブ・ラーニング・スペースという大きな概念の中に改めて位置づけたうえで、その活動内容の充実とスペースの活用をさらに検討するとともに、学生生活にもたらす効果などを検証していく必要がある。また、アクティブ・ラーニング・スペースの可能性や多様性を社会全体で育てていくためにも、学内外への情報提供・情報発信に積極的に取り組まなければならない。

謝辞

本研究は2022年度学長指定課題研究に採択されている。この場を借りて、感謝申し上げたい。

註

¹ 2018年度は「CASA」と表記していたが、大文字では何かの略称に見えるとの指摘があり、2019年度からは「Casa」を正式な表記とした。

² Udemy Businessとは民間企業が提供する動画コンテンツを用いたオンライン学習プラットフォームである。主に社会人向けの講座が提供されているが、大学生が活用することもできるプレゼンテーションスキル、語学学習、動画編集等の講座もある。

³ 文部科学省、「これからの時代の地域における大学の在り方について－地方の活性化と地域の中核となる大学の実現－」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00007.html,2023.9.11取得

⁴ 文部科学省、「これからの時代の地域における大学の在り方について－地方の活性化と地域の中核となる大学の実現－」(審議まとめ)概要 https://www.mext.go.jp/content/20220112-mxt_koutou01-000019888-0002.pdf,2023.9.11取得

⁵ 茂出木 理子,「ラーニング・コモンズの可能性:魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ(<特集>レファレンス再考)」,情報の科学と技術58(7),341-346,2008

⁶ 片山俊治,「ラーニング・コモンズ:学生支援との連携(訳)」,大学図書館研究83,6-10,2008

⁷ 文部科学省,「大学における教育内容等の改革状況等について(平成23年度)」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm,2023.9.12取得

⁸ 同上

⁹ 文部科学省,「大学における教育内容等の改革状況等について(平成27年度)」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1398426.htm,2023.9.12取得

¹⁰ 文部科学省,「大学における教育内容等の改革状況等について(平成28年度)」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm,2023.9.12取得

¹¹ 同上

¹² 文部科学省,「大学における教育内容等の改革状況等について(令和3年度)」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00010.htm,2023.9.12取得